

トピックス 第7回江戸川区教室交流会開催

今回で第7回となる江戸川区教室交流会は、3月17日（日）、北葛西コミ館ホールで、区内15教室から150名近くが参加して開催されました。会は土田支部長、蒔澤副支部長のご挨拶にはじまり、全員での二十四式演舞、各教室の先生による模範演舞、3グループに分かれての不老拳や対面太極拳の競演、全員での百花拳など、いつものように楽しく交流して終わりました。



なお、小生は江戸川区代議員として第1回から企画、運営にかかわってまいりましたが、今期で代議員を退任しますので、最後のお仕事となりました。【写真上;全員での演舞】

東大島鶴の会でTシャツ新調

江東区の東大島文化センターをベースに活動している「東大島鶴の会」（指導;茶木登茂一 代表;鈴木武）では、このほどTシャツを新調して、心新たに稽古に励んでおります。会も発足以来12年となりましたが、現在の会員数は私以下38名です。指導は私のほかに、藤城弘子師範を師範代に置き、さらに菊地保、森田璃絵子両師範にアシストしていただく体制で万全を期しております。さらに今年3月には4人が奥伝を授与されましたので、将来が楽しみです。【写真は新Tシャツでの練習風景・場所は江東区総合区民センターレクホール】



閑人閑話 横網町公園を訪ねて

先日15年ぶりぐらいに、両国の「横網町公園」を訪ねてきました。この公園は元陸軍被服廠の跡地です。公園にすべく空き地になったところで、1923年（大正12年）9月1日、大地震が発生し、避難してきた4万人もの人に、猛烈な火災旋風が襲ってきて、なんと3万8千人！が亡くなったという悲劇の地です。【写真右、その惨状】

関東大震災と呼ばれているこの地震は相模湾北部で発生した海溝型地震とそれに誘発された二つの地震の相乗効果で、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県などを最大震度7の強震が襲ったこと、沿岸部を最大10メートルもの津波が襲ったこと、おりから能登半島付近にあった台風の影響で関東地



方も強い風が吹いており、火災の延焼が防げなかったこと、などから、結局 10 万 5 千人もの死者、行方不明者を出すに至る史上最大規模の大震災となったわけです。

この陸軍被服廠の跡地には、東京のあちこちで亡くなった方々もあわせて、身元不明者の遺骨を収める「納骨堂」と「慰霊堂」が建てられ、また、当時の被害や復興の状況を伝える「復興記念館」も建てられました。現在では、東京大空襲（1945年3月10日）の犠牲者のうち、身元不明者の遺骨もあわせて慰霊する「東京都慰霊堂」と改称されています。

公園の北側にある「復興記念館」【右上】には、当時の惨状を伝える写真や新聞記事、あるいは焼けて溶けてしまった数々の生活用品や事務用品などが展示されていて、いまさらながらその惨禍に驚かされます。



西側には「東京都慰霊堂」【右下】とその背後に隣接するように三重塔形式の「納骨堂」があります。慰霊堂に入ると、一瞬のうちに、冷え冷えと重苦しい気に取り囲まれるような気持ちになります。お線香やろうそくの香りが漂い、見上げれば、当時の惨状を描いた大きな絵画がいくつも掲げられています。震災で、そして空襲で、亡くなり、ここに収められている、十万余の不遇な死者の霊が、じっと私に語りかけているような気さえました。祭壇に歩み寄り、ろうそくに火を灯し、線香を付けて、心から祈りました。



外へ出れば、公園で遊ぶ子供たちの声に、穏やかな春の日差しに、救われたような心地がしました。震災から 96 年、大空襲から 74 年、東京はその後、いろいろ大事件はありましたが、幸いにして大地震はなく、まあ平穏な日々が続いています。あらためてこの平穏と平和の歳月に感謝していますが、同時にまた何やら、漠然とした不安が胸を去来することも避け得ません。お釈迦様の言われた「すべては無常なり」というお言葉も心に浮かびます。私は、慰霊堂に向かってもう一度頭を下げて、祈りをささげて公園を後にしました。

旅をうたい拳を詠む 横網町公園にて詠む

非業なる死者の霊魂満ち満ちて慰霊堂内冷たく重し
いまさらに思いたせり震災と空襲受けし東京の街
震災で火災旋風吹き荒れし被服廠跡いま春うらら

左顧右盼 第22話 『太極拳とは何か(再編集・再掲版)』(第11回)

～趙匡胤の「探馬勢」から太極拳の「高探馬」にいたる軌跡をたどる～

23 楊名時太極拳の創始とその発展

楊名時太極拳は、前章でご紹介した「簡化二十四式太極拳」をベースに成り立っていることは、

皆さんご承知の通りです。この章では、そのいきさつなどについて、楊名時先生の書かれた文章などに基づいてお話しいたします。楊名時先生の自著『太極この道を行く』(A)、『楊名時太極拳 30 年史』(B)、そのほか『太極拳の真髓』(李天驥先生著)、『日中太極拳交流史』(李自力著)などを参考にしております。

① それは 1960 年に始まった

当時、楊名時先生が教鞭をとっておられたアジアアフリカ語学院で太極拳の指導を始められました。これを“最初の一粒の種がまかれた年”とされておられます。(AのP144)

② 「簡化二十四式太極拳」をどうして知ったのか？

新中国において「簡化二十四式太極拳」が制定された 1956 年(昭和 31 年)の、わずか 2 年後の 1958 年ごろ、中国のご友人からその「掛図」が送られてきて、留学生仲間の王勝之さんとともに勉強して、すぐ習得することができたと書かれています。(AのP141～)

③ 武道館で大きく開花

1967 年(昭和 42 年)の日本空手協会道場の鏡開きで、楊名時先生がこの太極拳を披露したところ、たいへんな評判になって、日本武道館で教室を開くこととなり、三笠宮様はじめ、有名人も参加されるなど大きく注目を集めました。また一方ではテレビなどでも、黒柳徹子さん、久米宏さん、兼高かおるさんなどの人気番組にも呼ばれるなど、一躍、楊名時先生の太極拳は日本中に知られるようになったのです。これには当時の日本人の親中感情が大きく影響していたことは間違いありません。先生は、日中友好のために期せずして大きな役割を果たされたわけです。

その後、残念な事情があって、日本武道館の教室は 5 年で終わりとなりましたが、1974 年(昭和 49 年)の、新宿と名古屋の朝日カルチャーセンターでの太極拳教室の開講を皮切りに、どんどん全国へと広まっていったわけです。(AのP158～、P172～)

④ 最初の教則本「太極拳」出版

1971 年(昭和 46 年)12 月に文化出版局から『太極拳——中国八億人民の健康体操』が出版され再版を重ねました。この本は 1986 年(昭和 61 年)に『新装版・太極拳』として再出版され、また多くの版を重ねました。紹介しているのは「簡化二十四式太極拳」としてありますが、その動きは現在と同じく“楊名時二十四式太極拳”そのものです。

⑤ 楊名時八段錦・太極拳友好会の発足

1975 年(昭和 50 年)1 月に「楊名時八段錦・太極拳友好会」が発足しました。ここで、八段錦と太極拳を組み合わせた独自のカリキュラムが確立しました。内容的には、日本健康太極拳協会のホームページで紹介されている通り、“簡化 24 式太極拳に、呼吸を重視して心を込めて動くという独自の工夫を加えるとともに、八段錦とあわせて二本柱としたものです。楊名時八段錦・太極拳は、呼吸法に従い、心と体のバランスをとり、他の人と競い合わないで、健康と長寿を主な目的としているバランス運動”なのです。

この背景には、中国においての太極拳の競技スポーツ化(つまり演技を採点して勝敗を決める)の方向が次第に明確となってきたこともあり、それには賛同出来ない楊名時先生としては、独自の組織を樹立せざるを得なかった事情もあったわけです。

しかし、「和せど同ぜず」と言う先生の信念から、その後もいわゆる武術太極拳の組織とは友好的につきあってゆくわけですが、さらに楊名時先生は、簡化二十四式太極拳の制定責任者である李天驥先生を日本にご招待すべく、「われわれは主に簡化二十四式太極拳を日本でやっておりますので、ぜひ……」と招待状を出されて、これに応じて、中国政府は、いわば一民間団体である「楊名時八段錦・太極拳友好会」に対して、李天驥先生の派遣を許諾し、1986 年にそれが実現したわけです。

中国側がいかにか楊名時先生の日本における太極拳普及活動、ひいては日中友好運動に対する強い影響力を、高く評価していたかと言うことがわかります。

一品・一葉・一会 第11回 1976年 インドネシアでの出会

1976年の秋にインドネシアの首都ジャカルタで訪問した会社の経営者の方からいただいたのが、この観音菩薩像【右】です。貴重そうなものなので固辞したのですが、断りきれずに頂戴してきました。その方はインドネシアに多いいわゆる華僑のひとりで、何代か前に福建省から渡ってきて、ここでビジネスを成功させた一族です。

インドネシアでは華僑の力は非常に強くて、経済の9割を華僑が握っているなどと言われていたものです。反面それに対する大衆の反感も強く、何度か華僑排斥運動が起きています。最近で激しかったのが1998年、アジア通貨危機に端を発した大暴動で、多くの華僑たちの商店や家が焼かれ、約1000人が殺されたと言われています。

インドネシアは人種的にも、ジャワ系、マレー系など幾多の民族の混合国家であり、宗教的にはイスラム教が圧倒的に多いのですが、キリスト教徒、仏教徒、ヒンズー教徒もおります。地理的にも、数多くの島嶼から成り立っていますし、地域による民族偏差もあるようなので、なかなか難しい国のようにですが、その後も、最近にいたるまで、中華系に対する迫害や暴動は何度か起きています。

インドネシアに限らず、東南アジア全域で目立つのが、華僑と印僑です。印僑とは聞きなれない言葉かもしれませんが、本来的には“インド移民”と言う意味ですが、実際には、移民先で金融や貿易などの事業で財を成したインド系の事業者たちを指すことが多いようです。華僑ほどの人的勢力ではありませんが、独特のネットワークで、世界中に根を張って活躍しています。

私も、この時に一人のインド人青年実業家に会いました。ラクシュミー・ミタル (1950～) がその名前で、ちょうど小さな電炉工場をジャワ島の東部の都市スラバヤで立ち上げたところでしたので、会いに行って、いろいろと意見交換をしました。

彼のことはその後しばらくは脳裡から去っていたのですが、だいぶ経ってから、世界各地で鉄鋼メーカーの買収を始めたことを知るようになって、あの彼が！と思い出しました。

さらに、2004年には米国の大手鉄鋼メーカーのI S Gを買収して世界中を驚かせ、さらにさらに、2006年には、ルクセンブルグのアルセロール社 (世界第2位) を買収、ダントツの世界一の鉄鋼王にのし上がりました。こののちしばらくはおとなしかったのですが、昨年にはイタリアの大手鉄鋼メーカー「イルバ (旧イタルシデール)」を買収していますし、次の狙いは日本か韓国かなどとの噂もあるようです。

また、3月5日に発表されたフォーブス社の2019年版世界長者番付けでも91位に入っている大富豪 (総資産136億ドル≒1.5兆円) でもあります。じつは2018年のフォーブス番付では62位だったのですが、イルバの買収で個人資産をだいぶ減らしたものと推察されます。【右写真はフォーブス社の長者番付表からのコピー】

2004年にはベルサイユ宮殿を6日間借り切って、76億円を費やして愛娘の結婚式を挙げたという、とんでもないエピソードも残っています。43年前に会った時には、まったく想像もできなかった大変身、大躍進です。印僑恐るべしと言うことで、ご紹介しました。

